

「愚公、山を移す」

埼玉県 高等学校 (地理歴史) 教諭 (120 期 史学科)

【愚公、山を移す】『列子』「湯問」篇によれば、愚公という老人が齢 90 にして通行に不便な山を他所へ移そうと自力で土を運び始めたのを天帝が感心し、ついにはこの山を他へ移した、という寓話。転じて、**たゆまぬ努力を続ければ、いつかは大きな事業もなしとげ得る**ことの譬え。

「教員になりたい」という思いはあつて、一般企業には目もくれず教職一本でいこう、と心には決めていても、勉強を始める踏ん切りがいまひとつ付かなかつた——というのが、3年後期の私の姿でした。

そんな私が一念発起をする契機となつたのがキャリアサポート課による春期の講習会でした。講習会のカリキュラムで自分の力が専門教養・教職教養・小論文とありとあらゆる面で不足していることを痛感し、なかでも小論文は「自分はこんなにも文章が書けないのか」と愕然したことをよく覚えています。その一方、講習会を通じて佐藤先生や山川先生をはじめとする先生方のご指導や、本気で教職を目指している仲間たちと誼を通じる機会を得たことは残りの期間を遮二無二取り組もうと決意させ、モチベーションの向上につながりました。

4年次が始まった段階で、一次試験までは残り3カ月——。私は、特段奇を衒うような勉強をしたわけでもなければ特別な勉強法を行ったわけでもありませんでした。ただひたすら、教育実習の準備も兼ねた専門教科の勉強と、教職教養の勉強を続けていました。

試験までの日々の中で、私が忘れずに行っていたことは、「とにかく文章に触れ続ける」ということでした。特に新聞がそうなのですが、とにかく毎日必ず新聞には目を通して国内や世界の動き、もっと細かな視点では住んでいる地域の動きは必ず読んでいました。社会科という教科を教える以上、世の中に対して鋭敏な感覚を持ち続けていくことが不可欠だと思い、とにかく新聞は読み続けるということは「何となく」で教員を志望していた高校時代から続けていた事でもあります。

それ以外にも、専門教科に関連のありそうな本はまず手に取って読んでみる、ということは意識して行っていました。何か教材研究として活かせないか、こういう話は授業中に合間合間に話すことはできないか——など、授業と関連付けながら自分の専門性を伸ばすべく、積極的に色々な本を読んでみました。

文章に触れ続けることで、所謂一般教養のような分野に対しても対策をすることができました。さらに埼玉県が二次試験で行う総合読解の試験では、スムーズに長文を読んで筆者の主張を掴むことが出来ました。

色々な本を読んで、幅広い教養を身につけること、研究心や知的好奇心を忘れずに、専門教科に向き合うこと。この2点を常に心がけ、教育実習や一次試験、二次試験に臨んでいきました。そして、今後もこの思いを忘れずに教員として在り続けていきます。